

# 黎明へ運ぶ列車

淫鬼喰らい巫子・竈門炭治郎 2  
体験版

「目が覚めたか？」

炭治郎が気づくと、彫りが深く目力の強い美男が自分を見下ろしていた。

「ここは・・・」

部屋は薄暗く、白檀に似た香が焚き染められている。広い和室に肌触りの良い布団に寝かされ、炭治郎も浴衣に着替えさせられていた。

状況は全くわからないが、今自分の身体は淫欲で酷く疼いているのはしっかり感じられる。目の前にこの人がいなければ、自分で慰めていただろう。

「どうして、煉獄先生が・・・」

目の前にいる、もさもさの金髪に赤のレイヤーが入った派手な顔立ちの青年は、煉獄杏寿郎だ。キメツ学園で歴史の先生をしていて、生徒からの人気も高く、熱心な先生だと評判だが、義勇から聞かされた話では、彼も「柱」の一人らしい。目の前に、そして夜のこんな時間に煉獄といると言う事は、これから何か儀式でもするのだろうか。

「竈門少年！この場で「先生」はやめてほしい」

そう言って炭治郎の口を塞ぐ。煉獄の匂いを嗅いで感情を知りたかったが、何故か今の炭治郎の鼻は常人と同じほどしか利かなくなっている。

煉獄も自分と同じ浴衣姿だ。逞しい身体に纏う和服姿は、絵になるほど格好がいい。

「率直に言うが、これから君を抱く！」

いきなり宣言されて、炭治郎は、え、としか言葉が出ない。

「なんでも不穏な輩に掴まって薬物を吸わされたらしいな！うむ！明らかな君の失態だ」

大きな声で指摘されて炭治郎は恐縮してしまいが、少しずつ気を失う直前のことを思い出してきた。そういえば、数人の男に妙な薬を嗅がされて、さらにホテルに連れ込まれてパイプで妙な煙を吸わされた。服を脱がされそうになって、それから気を失って覚えがない。

「あの・・・煉獄せ・・・煉獄さんが助けてくれたんですか？」

「いや！君を助けたのは富岡だ。俺は富岡の頼みで、これから君を抱くことになった！」

炭治郎は当惑で眩暈がしそうだった。さっきから煉獄が自分を抱く、抱く、と口にしてはいるが、何故そんなことをする必要があるのだろう。なぜ義勇に助けられて、今自分が和室に居て、自分をこれから抱くと言う煉獄がいるのか。

「・・・ちよつと俺、なんでこんなことになっているのか・・・わからないんですけど・・・」

「うん！そうだな！端的に説明すると、君は今、身体に陽気を取り入れなければいけない危険な状態らしい。富岡では無理だ！だから俺が陽気を注ぐというわけだ」

本当に端的だな・・・と炭治郎は戸惑ったが、今の自分の身体は確かに酷い発情状態で、それなのに手足が冷え切っているのを感じ取っている。死にはしないが、積極的に陽気を取り入れないと、自然回復するのに二、三日は床に臥すことになってしまうだろう。

目の前にいる煉獄は明らかによく錬磨された陽気の持ち主で、今の自分には打って付けの相手ではあるが、炭治郎は当然困惑した。

(俺、これから煉獄先生に抱かれるのか？ちよつと想像つかない・・・)

真夏の太陽のような煉獄と、これから秘めやかな闘事を始めるのかと思うと、色々心配になってくる。

(煉獄先生、疎いのかな？それとも意外と手慣れているのかな・・・俺の方から動いてもいいのかな、不機嫌にならないかな)

色々グルグルと思索していたが、そうしている間に煉獄が手を突き出し、上体を起こしていた炭治郎を寝かせて、上から覆い被さってきた。

(うわ、ちよつと・・・いや、かなり恥ずかしいぞこれは！)

彼の歴史の授業を炭治郎は受けたことがないので直接指導鞭撻されたことはないが、時折学校で見かける彼の周りにはいつも生徒がいて、まさに陽の気の塊みたいな人だ。そんな人とこれからセックスをするなど、なんだか禁忌に触れるような気がする。

「ちよ、ちよつと待ってください！煉獄先生！」

「先生はやめてほしい」

「いやっ・・・あの、煉獄・・・さん、俺、男ですよ・・・？その、やり方とか・・・わかり・・・ます・・・？」

炭治郎が煉獄の様子をうかがいながら尻すぼみな声で聞く。

「ああ、富岡に、勝手に濡れるから適当にシリにぶちこんでやればいい、と言われた！」

「・・・・・・・・」

（義勇さん——！）

確かにその通りだが言い方が酷い。しかしざっくりだが義勇の言ったことに間違いはないので、炭治郎は覚悟を決めた。

「わ、わかりました・・・では、申し訳ないですけれど・・・お願いします・・・」  
そう言つて炭治郎は緩慢な動きでうつ伏せになり、四つん這いになった。

「なんのつもりだ、竈門少年」

「いえ、もうこのまま浴衣めくって・・・」

炭治郎が説明しようとする、突然身体を掴まれて一瞬で仰向けに戻された。そして、煉獄が顔をいやに近づけて話しかけてくる。

「竈門少年、俺はこういうのはちゃんと手順を踏んでやらないといかんと思うんだ。することだけをして済ますようなものではないと思う」

「い、いや、でも・・・」

言い淀んで顔を逸らす炭治郎を見つめ続け、煉獄はその片手を取って握り始めた。

「うん！冷たくなっている。すぐに陽気が必要だな」

「はあ・・・」

「竈門少年、安心してくれ！君の嫌がるようなことはしない。だから安心して俺に身を任せてほしい」

右手を握られて揉まれるが、煉獄の手は大きくて分厚くて、ものすごく温かい。義勇の手も温かいが、煉獄の熱は骨の芯まで伝わるような温かさなのだ。義勇の手も熱いが、ヒリついて肌を焦がしてくるようなあの熱とは違う。

「口づけをしてもいいか？」

いちいち確認してくる煉獄に、炭治郎は恥ずかしさが止まらない。

「ええ・・・はい、どうぞ・・・いや、お願いします・・・」

炭治郎が言い終わらないうちに突然煉獄に押し倒され、そのまま真上からキスをされた。煉獄の唇は分厚くて、そしてやはり熱い。

(ひえ・・・)

口の中に舌を入れられ、口腔をまさぐられる。煉獄から一気に大量の陽気が流れ込み、陽気を枯渇させている炭治郎の身体に沁みる。煉獄の陽気が口から喉を通って上半身に伝わり、両手が熱くなる。

唇に刺激を与えられ、熱を感じてから、炭治郎の身体は徐々に昂りが強くなっていった。

すでに身体は淫熱に包まれていたが、口づけをされたことで身体の欲情の芯が燃え上がり、胎の奥がトロリと溶解します。

心音がどんどん上がり、身体の中で欲情が限界まで膨れ上がる。無意識に炭治郎は煉獄の腕に縋り、されるがままだった口づけへ積極的に舌を絡めるような仕草をし、煉獄の唾液を飲み込む。

「んん・・・」

つい鼻にかかった甘い声を上げてしまったが、炭治郎は羞恥心を忘れて唇の愉悦に耽溺してしまう。

不意に唇を離されて快樂が無くなった寂しさに薄目を開くと、煉獄が真顔になって炭治郎を見つめていた。

（あ、俺これから抱かれるんだ）

これまで数知れず男と交わってきた炭治郎には、目を見ると、相手の「これから自分を真剣に抱く」という意思を読み取れるようになっていた。今の煉獄の瞳がそうだ。目線が鋭くなり、瞳孔が開いて、灼けつくほどの熱い視線が炭治郎を見つめている。

急に羞恥心が湧き上がってきて、炭治郎は潤ませた目線を逸らせる。

「あ、あんまり見ないでください・・・」

しかし顎を取られてまた口づけされるが、そのまま頭に手を回されて動きを固定され、先ほどよりも激しいキスを施してくる。

「んっ・・・んん・・・」

身体の奥がカアと熱くなり、身体の芯が灼けてくる。欲情で吐息が乱れるが、口づけを止めるどころかさらに深くまで舌を突き入れられて、酸欠と淫熱で眩暈がしそうだった。

「んっ、はあ、はあ、は・・・」

煉獄の大きな手のひらが、あやすように炭治郎の頭を撫で、顔中にキスを落される。

（あ・・・ぞくぞくする・・・）

そのまま耳にまで舌を這わされ、弱い性感帯に直接陽気が流れ込み、堪らず炭治郎は甘い声を上げてしまふ。

「ああ、あつ・・・」

首の後ろから背中にかけてゾゾ、と官能が走り、腰の奥が熱くなって胎が濡れるのを感じる。膝を立てたかったが、煉獄に四つん這いの姿勢で身体の上ののしかかられて両足で挟まれ、動くことができない。性感が極限まで高まり始めているのに、これでは身動き一つとれない。

煉獄の両手が焦れる炭治郎の首筋を撫で、鎖骨を通って浴衣を開け、その中に侵入してくる。熱い煉獄の掌になぞられ、肌が快感で震え、炭治郎は欲情に濡れた目を閉じ、目端に涙の粒を浮かべた。

再び煉獄に口づけをされるが、もう抵抗や羞恥の意識はない。薄目を開けた眼前に煉獄の真剣な顔がある。光のせいか、多少顔が朱くなっているように見えたのは気のせいだろうか。

「君は・・・間近で見ると本当に愛いなあ・・・」

普段なら照れて恥じ入るところだが、炭治郎は身体の疼熱が高まっていて正常な思考が働かない。はあはあと熱い吐息をつき、上半身を撫で回す熱い煉獄の掌に意識が持っていかれてしまう。

「んっ、あ、そこは・・・」

不意に煉獄の掌が桜色にかかり、炭治郎は身体を小さく跳ね上げた。弾けるように感じた胸の快感に身体が熱がさらに上がり、身体中の肌が性に対して恐ろしく食欲になってしまう。

「嫌だろっか？」

煉獄に真剣な目で迫られ、心音が一瞬高くなる。

「い、いえ・・・大丈夫です・・・」

弱々しい声で炭治郎が返答すると、煉獄の指はすぐに桜色に触れてきた。



「んぐっ・・・」

生来の感じやすさと薬物による欲情の上に、煉獄の強烈な陽気が重なって、この態勢でなければ暴れだしたいほどの快感が染み入ってくる。

桜色に指を這わされ、堪えようのない官能がはち切れて炭治郎は背中を反らせて身悶えた。

「ああ、あ、あああつ・・・！」

触れられるたびに微量の電流が流されるような淫刺激を感じ、炭治郎はとうとう善がり声を上げてしまう。炭治郎の両手はすでに煉獄の逞しい背中に回され、浴衣の布を掴んでいた。

もう片方の桜色にも指を掛けられ、左右で感じる快樂で、炭治郎が首を振り、継る手に力を入れながら性悦に耐える。

「んっ、んんっ・・・！ああ、あああああつ・・・！」

きゅ、と片方を抓まれ、はしたない声が零れてしまう。しかも炭治郎には堪えることができなかつた。

「うん、実に愛い。堪らんな、君は」

再び激しく口づけをされるが、口づけをされながら桜色も刺激され、炭治郎の背中に官能の震えが走破し、それが何度も訪れる。

口づけをされながら性感帯に触れられると、倍以上に感じてしまう。この癖を付けたのは義勇だったが、炭治郎の身体は相手が義勇でなくても、過剰に反応してしまう因果な質になっていた。

煉獄のキスは熟達しているとは言えないが、とても激しくて情熱的だ。何よりも流れてくる強烈な陽気が気持ちよくて、口から首を通って体中に熱い奔流が流れ込む。

「ん、んっ、ん……」

首の後ろがゾクゾクと痺れ、桜色に触れられている熱い感覚も手伝って、淫熱で火照って身体が限界まで欲情してしまう。

自ら快感に流されることがないように、炭治郎は一応の訓練を受けているが、この修行がめっぼう弱く、結局最後までこの修練に関しては修了を言い渡されなかった。

—— お前は気持ちいいと我慢できない

義勇にも言われたが、師匠にも言われた。何故か、炭治郎の無意識の中では「気持ちいいのを我慢するのは悪いこと」と言う考えが沁みついていて、同時に気持ちよくて何が悪い、という考えも浮かんでくる。「無惨の影響か」と言われると忌々しくて仕方がないが、身体は勝手に意思を裏切って暴走し、欲情が巡り走る。

「はあ、あっ……」

首筋に唇を落とされ、煉獄の大きい手が胸から離れて下腹部へと移動してゆく。

「君の身体は実に良いな。鍛え甲斐のある筋肉もついているし、しなやかさもある。なにより……」  
煉獄が炭治郎の浴衣が開けた胸から下腹部にかけて掌を撫で落とし、目を細めて言う。

「この肌の触り心地は抜群だ。このような感触は初めてだ」

腹筋を撫で擦られて、炭治郎の身体に熱い快感が沁み込んでくる。

(そ、そんな風に言われると恥ずかしい・・・)

羞恥に首元を熱くさせながらも、煉獄に触れられているところから淫熱が湧き上がり、撫でられている腹筋の下、下半身がどんどん熱くなってゆく。

「うわっ！あ、あああっ・・・！」

浴衣越しに雛先に触れられ、大きくて熱い手に布越しで触れられる感覚に腰が甘く痺れてしまう。優しく愛撫され続けていた身体はすでに欲情の限界にあり、雛先からは淫液が零れ浴衣の前を濡らすほどになつていた。

(恥ずかしい、煉獄さんに気づかれた)

衣服が濡れるほど感じてしまっている自分の身体を見て、浅ましいと思われただろうか。セックスなどほとんど毎日のようにしていると言うのに、煉獄の前だと胸が処女のように高鳴り、恥じ入ってしまう。

「竈門少年、浴衣を捲ってもいいか」

(いちいち言わなくてもいいのに！)

正直自分の昂っている姿など見せたくなかったが、炭治郎は煉獄の言葉に、どうぞ、と小さく答えた。浴衣の裾が左右に大きく開かれ、腰帯の根元まで開かされ、隠れていた炭治郎の秘部が現れる。とうに濡れてしまっている雛先を煉獄に見られているのだと思うと、いたたまれないほど恥ずかしい。

(手順なんてどうでもいいから、ほんとさっさと突っ込んで終わってほしい！)

炭治郎は最初の煉獄の提案に素直に応じてしまったことを今更後悔した。あの時、一刻も早く陽気が必要だ、などと言って、すぐに胎に突き挿れてもらっていたら、今頃はもう終わっていただろう。

炭治郎が羞恥で後悔に暮れていると、雛先に熱くて腰が溶けそうな快感が生じた。

「あああ……っ」

煉獄の掌が炭治郎の雛先を握り、ゆっくりと上下に擦り始め、両足が震えるほどの愉悦が巻き起こる。

「あ、あ、そ、そんなところ、触らなくても……！」

「見たところ辛そうだったからな。痛みはないか？竈門少年」

「んんっ……ない、ですけれど……」

煉獄の熱い手から陽気が性感神経の塊に沁み込み、叫びだしたいほどの快感が襲ってくる。全身にゾクゾクと微弱な電流が走り、雛先を愛撫される快感に炭治郎は羞恥を忘れて艶声を上げてしまう。

「あ……あっ……ああああ……っ！熱い、ですっ……！熱いのが、流れてきて……」

先端から淫液が零れているのが自分でもわかる。強弱をつけて根元から先端までを擦られ、一擦りごとに腰が勝手に小刻みに震えて、口をしっかり閉じていないと涎が出てしまいそうなのに気持ちがいい。

「んっ、んっ、ああああっ……も、もう、だめです、ダメ……っ！」

「我慢することはない。思う存分出すんだ」

先端部分を指で絡められて鈴口を親指の腹で素早く擦られた瞬間、炭治郎の性感が弾けた。

「あああっ——！！」

煉獄に言われるまま、雛先から白液を吐き出し、身体中を激しく痙攣させる。陽気を流されながらの達悦は通常の射精よりもはるかに快感が強く、身体の反応を抑えることができず、派手に絶頂を迎えてし

まう。しかも煉獄は炭治郎の性感をなぞりながら、一番気持ちのいいタイミングで射精させ、頭の芯が痺れるような手管で絶頂を迎えさせた。

「んあ・・・はあ、はあ・・・」

肌に汗の珠を浮かせ、炭治郎の身体から甘い華の香りが漂う。あまりの気持ちよさに意識が妄つとしてしまい、赫い目は焦点を合わせられず、未だに絶頂の余韻の中にいた。まだ煉獄が炭治郎の雛先から手を離さず、ゆるゆると愛撫を続けているのも要因だが、それがまた新たな快感の呼び水となって炭治郎の淫欲を燃え上がらせる。

「あっ・・・俺・・・すみま・・・せ・・・」

陽気を流されながらの愛撫は強烈で、射精したばかりの雛先は再び反応しだし、すでに先端から淫液を滴り落としている。

煉獄は雛先を片手でゆるく愛撫しながら、炭治郎に口づける。キスをされながら性感帯に触れられると、自制が効かなくなるほど強烈な愉悦を感じる。炭治郎は絶頂で呆けた頭をさらに霞ませて快樂に耽溺し、煉獄の熱いキスを受けながら両手でその金髪の頭を抱え込む。

（気持ちいい・・・熱くてこんなに気持ちいいなんて・・・）

純粹に愉悦を感じていた炭治郎だったが、煉獄に口を離され、両手で胸元を触られて、すつと下半身に移動すると、広げた炭治郎の両足の間に、煉獄は顔を埋めた。

「ひえっ・・・れ、煉獄さん・・・！」

煉獄の熱い舌が雛先を根元から先端まで舐め上げ、舌の熱さと陽気の熱さで腰が蕩けてしまいそうだった。しかし、炭治郎はあの煉獄に口淫をされているという事実が恥ずかしくて堪らず、無意識に生じた抵抗の意思が、その金髪の頭を掴んだ。

「や、やめてください！そ、そんな・・・ことっ・・・！」

根元を片手で扱きながら、先端部分を口に包まれ、中の舌で鈴口を舐め回されて、飲み込めないほどの生唾が溢れ出て、炭治郎はあまりの快感に体中を痺れさせて腰を震わせる。

もっとも性感神経の密集した部分を触れられるだけで、炭治郎は快感で抵抗ができなくなる。それを、直接陽気を注がれながら、熱い舌で激しく愛撫されるのは、狂乱に値するほどの激しい愉悦だった。

「ああああっ・・・あ、は、あああっ！も、もう、イクっ・・・！」

腰が勝手にガクガクと痙攣し、炭治郎は煉獄の頭を押さえつけてしまう。その熱い口で全体を包まれ、強く吸引された瞬間、再び頭の中が白くなるほどの絶頂感が押し寄せ、炭治郎は煉獄の口の中に精液を放ち、達悦してしまった。

「ああああああああっ！」

足の指先から髪の毛の先まで甘く痺れる快感電流が全身を巡り、下半身で弾けた絶頂感に意識が薄れてしまう。さらに激しく吸引されて、炭治郎は首を振りたくって嬌声を上げ、腰を激しく仰け反らせて狂乱した。

「ああああっ！も、もう出た、でました、だ、め、やめて、ああああっ！また、出っ・・・！」  
じゅうう、と音を立てて再び激しく吸引され、また先端から白液が吐き出された。

「あああ——！」  
立て続けの快樂絶頂に、炭治郎は体中を震わせてその激悦に涙を流した。  
炭治郎の両膝が煉獄の頭を挟み、これ以上の快感は要らないのに、身体が勝手に悦んで、自分を気持ちよくしてくれる相手を逃がすまいと動いてしまう。

※中略※

「しかしお前は竈門炭治郎だ。赫子だ。ヒノカミの巫子だ。私の性欲処理の道具として傍へ置くのに、十分なプレミアがついている」

「っ、プレミアとかつ・・・！」

「だから淫欲に狂う前に十分愉しませてもらう。お前の精神力はたいしたものだよ、炭治郎」

「無惨っ・・・！」

怒気を露にする炭治郎を愉しそうに眺め、無惨は異様な筒を取り出した。筒と言っても、先は丸く塞がれている。

「これはお前の胎の中を再現した玩具だ。自分で自分の身体を味わえるなど、こんな体験をするのは世界でもお前ぐらいだろうな」

無惨は舌を出し、まるで蛇のようにそれを延ばすと、半分反応していた炭治郎の雛先を自在に舐め回し始めた。

「ふあっ！や、あああ、ああっ！」

無惨の冷たさすら感じる舌に翻弄され、先端から淫液が伝うほど昂らされてしまう。

炭治郎の雛先が十分に勃起上がったのを確認すると、無惨はその筒の穴のある部分を炭治郎の雛先へあてがう。

「うあつ・・・やめ・・・」

狭い入口を通過し、一気に中ほどまで筒で雛先を包まれ、突然愉悦が湧き上がってくる。筒は人肌より熱く、中はとても狭くて、愉悦を感じるのに丁度具合がいい締め付けに快樂の吐息が漏れる。

筒の中の周囲はざらざらしているが、奥から熱い粘液がとめどなく零れ、その淫液が手伝って、ぬるぬるとした感覚も同時に伝えてくる。

挿入されただけでこれだけ気持ちいいのに、これで激しく動かれては間違いなく射精してしまう。無惨は自分の胎の中を再現した、と言っていたが、そんなことなど信じられなかった。

「ううっ・・・ぐっ・・・はぐうううっ！」

一気に筒を根元まで押され、雛先全てが筒に覆われる。それだけで達悦しそうなほどの快感で、炭治郎は無意識に善がり声をあげていた。

「ああつ・・・あ・・・ああ・・・」

筒の入口はキュウと狭く、中は熱くてぬるぬるとザラザラに加え、不規則なうねりを続けている。最も感じやすい先端あたりからまた狭くなり、無数の襞があつて、先端を全方向から責めてくる。

筒の中を感じさせられているだけだと言うのに、口が緩んで唾液が垂れそうな愉悦だ。



「どうだ気持ちいいだろう？完全再現とは言えないが、より近づけたカタチだ。実際のお前は、まだこれの上をいく。これでも十分感じているようだな。動かしてやろう」

「あっ……！だめだ、だめ……！」

しかし無惨は炭治郎の訴えなど聞くはずもなく、筒を掴むと、無慈悲に激しく上下に動かした。

「あああああっ！ああ！あっ、や、やめ、あああっ！ああああっ！」

炭治郎の腰が痙攣し、一瞬緊張した直後、弛緩した。はあはあと荒い息を吐いて身体から力を抜いた様子は、間違いない絶頂した姿だ。

「よかったか？一分もたたずに射精するとは、情けないヤツだな。まあいい。続けてやる」

「やっ……やめっ……あっ！あっ！あああっ！」

全方向から締め付けられ、ガラガラとぬるぬるに加えて灼け付くような熱さが伴い、糜爛が先端をおぞましいほどに好く絡みついてくる。自分の放った精液が中に溜まり、それが余計にぬるつきを加速させ、快樂が連続した。

「あぐっ！ああっ！あっ！あっ！ああああ！」

二度目の絶頂だったが、一度目と変わらぬ心地よい射精感がこみあげ、炭治郎が背中を仰け反らせる。それがわかっていながら、無惨は筒の動きを止めない。

絶頂したばかりでさらに敏感になった雛先を、容赦なく極上の肉筒で扱き上げられ、炭治郎は身もたえず。結わえた髪を振り乱して縛られた四肢をうごめかせ、必死に快樂を散らそうとするが、その程度で意識を逸らせるほど、生易しい快樂ではなかった。

「んぐっ・・・！ああ、あ、ああ・・・っ！」

三度目の射精を迎え、相変わらず背筋が震える激悦に、炭治郎の身体が痙攣する。それでも責めは止められず、炭治郎はその後三回射精絶頂を味わわされた。

「ふあ、はあ、はあ、はあ・・・」

筒の中から吐き出した精液が逆流し、床の上に落下してゆく。六回の連続絶頂で体中をすでに汗まみれにさせ、炭治郎は気を失いかけて頭を垂れる。

「すまないな、炭治郎。この程度の悦しか与えられず、心苦しい限りだ。特別に、快楽を追加してやる」  
ようやく筒から手を離し、無惨はわざとらしく謝罪を述べてすでにグタリとしている炭治郎に話しかける。筒を動かさなくても、不規則に締まる内部の刺激で緩やかな快感が続き、炭治郎は絶頂直前の快感の間を揺蕩っていた。

「ううっ、うっ・・・」

（気持ちいい、気持ちいい・・・これが俺の身体の中なんて、嘘だ・・・）

無惨の言うことが本当なら、自分で自分を犯すという背徳行為を行ってしまったこととなり、そのおぞましさに炭治郎は戦慄する。だが、雛先を包み込んで快感を絶え間なく与えてくる筒の快楽で、強く意識に働いてこない。

いつの間にか周囲に配置していた鬼が、張り型を持って近づいてくる。

「後ろが寂しいままだろう。さつきからずっと淫蜜を垂らしているぞ・・・ここに、お前の魔羅を挿入してやるう」

そう言つて鬼が炭治郎に見せつけたのは、自分のものとは思えないエラの張った成人男性のもので、表面に無数に疣の隆起があり、先端に触手が蠢いている。さらに、鬼がスイッチを入れるとヴヴヴヴ、と音を立てて細かい振動を始めた。

「お前の実際のサイズでは物足りなからうと思つてな。少し細工させてもらった」  
少しどころではない。これから何の細工をされるのかわからないが、こんなものを挿入されるというだけで、炭治郎の腰は蕩けてしまう。

「っあ、い、いやだ！やめろ！絶対にダメだっ・・・！」

「なに遠慮するな・・・まずは味わってから感想を述べろ」

雛先の連続絶頂ですでに淫蜜でひたひたになっている秘孔へ、凶悪な張り型が突き挿れられる。

「んんんんっ・・・！」

疼痛を孕んでいた部分を暴かれる快感に炭治郎は歯を食いしばって耐えるが、感覚が胎だけではないことをすぐに知覚した。

「あ、う、うああああっ！あつ！これ、ああああっ！そ、そんなっ・・・！あああああ！」

張り型がずぶずぶと挿入されるたびに、雛先に筒の挿入とよく似た感触が走り、根元まで挿入された瞬間、先端を包み込んでくる異常な快感に身体が痺れる。

（そ、そんな、魔羅に張り型の受ける感覚が、伝わっているのか？）

鬼は根元まで飲み込ませた張り型を一気に引き抜き、また一気に奥まで突き上げる。凶悪な疣の隆起と先端の触手が洞内の性感帯全てを刺激し、胎で受ける快感がどんどん上昇してゆく。しかしそれ以上に、張り型が受けている感覚を共有している雛先は、押し寄せる快楽の波の凄さで弾けそうだった。

「うあああああつ！ぬ、抜け、抜いてくれ！これだめ、あああああああああつ！」  
余りの快楽の強さに炭治郎は汗を飛ばして首を激しく左右に振り、両足を閉じようと力を籠めるが綱はびくともしない。

身体中が小刻みに痙攣し、雛先の激感と胎の激悦が重なり、炭治郎はすぐに胎で絶頂してしまう。

「あああああああつ！」

それと同時に張り型から勢いよく精液が噴き出され、胎内に思う存分中出しされた。しかしこの張り型と炭治郎の雛先の感覚はつながっている。胎で達悦する直前の洞内の、甘美な動きと締め付け具合に涎が流れ、快感に蕩けそうになっていた瞬間、峻烈な射精絶頂の快感が訪れ、一気に覚醒させられた炭治郎が腰を突き出して激しい声で喘ぐ。

「んあつ！あああつああああああ——！！」

圧倒的な射精絶頂の快感が訪れるが、炭治郎の雛先は実際には射精していない。これほどの悦を与えられながら達せない苦しさも同時に受け、炭治郎は狂乱しそうだった。

「ふん」

乱れる炭治郎の様子を眺めていた無惨が、雛先を覆っている筒を捻った。

「あつ！ああああああああああああ！」

それだけの刺激で雛先は射精絶頂を迎えた。張り型の快感に負けない激悦が訪れ、極限まで緊張しきつた炭治郎の身体が一気に弛緩し、そのまま気を失ってしまった。

「こんな最中に寝るヤツがあるか。起きろ」

筒を掴んで一度上下させると、胎でトン、と衝撃が走り、炭治郎はゆっくりと目を覚ます。

「うっ・・・うう・・・」

洞内に挿入されたままの張り型はジンジンと快楽を伝えてくるが、動いた気配はない。考えたくもない事実に気づき、炭治郎の焦りと絶望が深くなる。

「お前・・・まさか・・・」

掠れた声で炭治郎が無惨へ恨めし気な視線を送り、無惨はそれを楽し気に受け止める。

「その筒も尻と共鳴するようにしているぞ。よかったな炭治郎。これはなかなか体験できない快楽の重なりだ。その身で受けられることを光栄に思え」

「このっ・・・!」

眉を吊り上げた炭治郎の胎を、張り型が容赦なく突いてくる。直前の怒った表情とは一転し、快楽に支配された表情で甘い声を上げた。

「あああっ・・・!」

回転するようにねじ込まれ、炭治郎が胎で感じる激悦が前の筒に伝わってくる。

「うあああっ!む、無理だ、あああっ!とめ、とめろっ・・・!ああああっ!」

背後から鬼の手が伸び、さらに雛先を覆っている筒を上下に激しく動かし始めた。

「ふあああつあつ！あつ、も、もう、またイく、で、出る、あああああ、と、止まらな・・・！」  
筒の内部の感覚も炭治郎の胎とつながり、二重の感覚が敏感な洞内を犯し、ありえない激悦に炭治郎は叫び声をあげる。雛先も激しく扱かれ、すぐに八度目の射精絶頂が訪れる。

「くううつ・・・うう——！！」  
肉体が削れるほどの強烈な絶頂感を与えられながら、炭治郎が奥歯を噛み締めて快楽を耐える。無防備に味わってしまったら、理性がちぎれそうだった。

※中略※

(うう・・・早く脱ぎたい・・・)

歩くたびに捲れ上がるスカートにドキドキしながら、炭治郎は多少周囲から浮いても「神装の方がまだましだ」、と思えるほどには恥ずかしくなっていた。

最後編成の四両目に辿り着いた時、炭治郎は確かに違和感を感じた。そして、強い陰気の気配がする。この車両は最後尾だけあって、他の車両より人が少なく、座席もチラホラ空いている。

しかし炭治郎はわざと吊革に掴まり、立って淫鬼が現れるのを待った。その間に片手で印を結び、心の中で

(解)

と唱えて印象操作の術を解き、淫鬼を誘う巫子の匂いを振り撒き始める。

(さあどうだ、来るのか・・・?)

正直早く終わってほしい。とにかく、女装姿がめっちゃくちゃ恥ずかしい。男の自分がセーラー服のスカートなんて、印象操作の術が解けた今、誰の目から見ても変態に見えるだろう。その証拠に、座っている客の数人がこちらに視線を向けてきている。

(恥ずかしい、恥ずかしすぎるぞ！早くかかってくれ！)

炭治郎が顔を耳まで真っ赤にしていると、急に電車の音が聞こえなくなり、身体が動かなくなった。

(来た！)

まるで車両ごと水の中に放り込まれたように静かになり、座席に座っている人たちが動きを止める。

(やはり時空結界・・・すると淫鬼はこの電車に・・・！)

すると座っていた男が数人、立ち上がって炭治郎の周囲を取り囲んできた。

「今日の子は上玉だな・・・胸は無いけれど、抜群に可愛いじゃないか」

吊革を掴んだまま身動きできない炭治郎の正面に回り、煙草の臭いをさせながら、炭治郎の顔をまじまじと見つめる。

(うっ・・・この臭い、苦手だ)

この臭いどころか、地下鉄の臭いごと炭治郎は苦手だ。鉄の擦れる臭いとエンジンの臭いで悪酔いしそうになり、人混みの様々な大衆とフレグランスで息が詰まりそうになる。前後不覚になってしまったのは元も子もないので、炭治郎は自分の嗅覚を封じる術をかけ、特技を止めていた。

鼻を利かせることができれば、いちいち車両を回ることなく痴漢たちの居場所を突き止められただろう。

「お前たちは昨日も女の子にこんなことをしたのか」

炭治郎は凄んだ声で煙草臭い中年男へ言葉を投げかける。しかし中年男は肩を揺らして嗤い、炭治郎の顔を覗き込みながら言った。

「動けないのに怯えてないなんて気が強いなあ……でも、助けは絶対に来ないよ。時間が経つまで俺たちにイカされ続けるんだ」

すると炭治郎を囲んだ五人ほどの男たちが、セーラー服越しに炭治郎の身体に触れてくる。

「うわっ！わっ……！」

いきなり背後から両胸を鷲掴みにされ、炭治郎が驚愕の声を上げる。いきなりここまで大胆に接触してくると思わなかったので大きな声を出してしまったが、感じたのは男の手の熱さと、同時に無視できないほどの淫熱を孕んでいて、その強さに炭治郎は信じられない思いだった。

（やっぱりこの人たち淫鬼に侵食されてる……一人一人浄化するか……いや、本体を見つけ出して浄化したほうがいい）

炭治郎はそう判断して、淫鬼が現れるまで男たちのされるがままでいようと決意した。

「なんだ、本当に全然胸がないなあ……でも腰の括れはたまんねえな……」

眼鏡を掛けた痩せて陰険そうな男が、炭治郎の腰に手を添え、そのままスカートの中に手を差し入れてくる。

「うわああっ！んんっ、くううっ……！」

直接臀部を触られて、布越しよりも強烈な淫熱が伝わり、炭治郎は艶めかしさを含んだ声を上げてしま



「あれ？Tバック履いてるの？お尻に直接触っちゃってるよ？それとも、ここに痴漢されに来たのかな？」

（うぐっ・・・そうだけれど、そんな変態みたいに言うな・・・）

それよりも、炭治郎は触られるたびに生じるありえないほどの快楽量に驚いていた。感じやすい巫子の身体だが、淫鬼でもないただの人間に触れられて、ここまで身体が昂るなど初めての経験だ。

（淫鬼の技巧が、男の手に付与されているのか・・・？）

男の手指が炭治郎の手触りの良い臀部を撫で回し、めり込んで動くたびに、人の愛撫ではありえない快感が湧き上がり、足がブルブルと震えてしまう。

「せめてオッパイ見せてよ・・・あれ？」

炭治郎が着ているセーラー服を捲り上げ、裸の胸を見た男が、珍妙な声を上げてまじまじとそこを見つめる。

「これ、貧乳とかじゃないね・・・君、男の子だね？」

「うっ・・・はい・・・」

消え入りそうなほど恥ずかしい。炭治郎は耳まで真っ赤にしているが、これで痴漢の動きが止まってしまつては本体の淫鬼まで辿り着くことができなくなる。

「流行りの男の娘ってヤツ？初めて会うよ。でも、可愛いね君。これまでその姿で、何人を墮としてきたのかな？」

羞恥に朱くなる顔を眺められながら、炭治郎はもうどうとでもなれ、とやけくそになり、口を開いた。

「うっ・・・ここで、痴漢してもらえて聞いて・・・されたくて、来ました・・・」

(そんなわけあるかー！)

自分でも突っ込む台詞だったが、痴漢されに女装して電車に乗り込んだのは事実だ。ただ、炭治郎の男としての矜持が認めたくないだけで、心の底で煮えたくる羞恥心と悔しさを抱えたまま、男たちへ媚びる言葉をなんとか紡ぐ。

「か、身体・・・さわってください・・・あっ！」

すると炭治郎のセーラー服を捲ってきた男が胸の桜色に指を乗せ、またしても人ではありえない淫熱を含んだ接触到、炭治郎は艶声を上げた。

「いいぜ？お前の肌、触り心地抜群だな。特別な手入れでもしてんのか？しつこく触って、嫌ッてほどイカせてやるよ」

炭治郎の臀部に触れていた手が一本増え、左右から双丘を揉みしだかれて、快感に愉悦のため息が出る。

巫子特有の男を誘う甘い華の香りが強くなり、周囲は巫子の淫気に当てられてますます興奮の度合いを深めた。

前から炭治郎のスカートの中に手を突っ込み、下履きに包まれた雛先を確認するように布越しで触り始め、最も敏感な性感帯への刺激に、炭治郎の背筋に甘い電流が走る。

「んんっ、んっ、ふぁ、あっ・・・」

「濡れてきてるね・・・感じてるんだ、悪い子だ・・・」

自分でも濡れて下着を湿らせていることはわかっていたが、それを指摘されると恥ずかしくて仕方がない。そのまま布越しに上下に擦られ、痺れるような甘い快感が生じ、吊革に掴まっていなければ足を折っていたほどの快感だった。

「本当だ、極上の触り心地だよ君の肌は・・・」

セーラー服を捲り上げた男がずっと桜色を指先で撫で回し続けているが、時折掌で炭治郎の胸から腹筋にかけて撫で回し、その極上の肌の感触を楽しんで荒い息を吐く。

その男の指だけでなく、背後からもう一本手が伸ばされ、炭治郎の空いた桜色にタッチしてきて、こちらはいきなり激しい勢いで桜色を上下に擦り立て始めた。

「あっ！あっ！あああっ！ああっ！うあああっ！」

両方の性感帯を責められ、指が桜色の表面をなぞるたびに、ぞくぞくと快感の炸薬が体内に打ち込まれる。触られ放題の下半身からも愉悦がせり上がり、上下でぶつかる快感に、炭治郎は我慢の限界に追いやられていた。

「あれ？君、今どきふんどしなんて履いてるの？古風だなあ・・・まあ、男の生理学上では、ふんどしが適しているとは言うけれどね。でも、君はそれが目的じゃないだろう？」

そう言うと、後ろの男と連携して前の男は布を掴み、強く上方へ食い込ませた。

「んんん———！！」

「こういう食い込みがたまらないんだろう？本当にエッチな子だなあ」

雛先がさらに濡れ、もう布では吸収しきれないほど感じてしまっている。ふんどしを食い込まされて秘孔にも会陰にも快感が走り、炭治郎の足はガクガクと震えがとまらない。

「辛そうだから、そろそろ一回イカせてやるぜ・・・さあ、胸とちんことどっちでイキたい？」

新しく増えた体格のいい男に耳元で囁かれ、炭治郎は身体に抱えた疼熱にはあはあと息を乱しながら、絶えず流し込まれる快感に陶醉しそうになっていた。

「はあ、はあ、も、もう嫌だ、いい加減にやめろ変態・・・」

炭治郎の豹変した態度の言葉だったが、男たちは逆に盛り上がりを見せた。

「なんだ、自分も変態のくせに俺たちを変態呼ばわりかよ？」

「こういう気の強い子を虐めて善がり狂わせるのが堪らないんだ！もっと俺たちを蔑んでくれていいんだよ？」

加虐的な言葉を吐く眼鏡を掛けた痩身の男が、スカートの下へ手を突っ込んで、双丘に食い込んだ布を伝い、急に引っ張ってズラすと、双丘のくぼみを一部曝け出した。

空気に晒された秘孔がヒクヒクと収縮し、身体が勝手に愉悦を欲しがって暴走し始めていた。

（感じるな、こんなヤツらに触られて感じるなんて、俺は変態じゃない・・・！）

しかし身体で感じる愉悦は本物で、とても我慢ができるものではなく、炭治郎は体中を異様な淫熱を持った指先で刺激され、昂りの最高潮にあった。

「このままちんこイカせてあげるね。胸でイッてもいいよ？君の気持ちがいいところで、思う存分絶頂するんだ」

煙草臭い男に耳を舐められ、炭治郎の身体に鳥肌が立つ。どうやら異常な性技を持つのは彼らの指だけで、その他の部分は淫鬼の恩恵を受けていないらしい。

しかしそれがわかったところで、金縛りにあつて身体中を発情させられ、一方的に快楽を注ぎ込まれる炭治郎には逃げ場はない。

布越しで完全に反応した雛先を擦られ、布のザラザラ感がいつもとは違う感触で、炭治郎は余計に悦を感じてしまう。

「ほらほら、もうイク？もうここびちよびちよだよ・・・エロいなあ、こんな可愛い子が・・・」

「んふうう、ああ、い、いやだ、あああつ！指止める、ん、あ、あああああつ！」

布越しに上下に激しく摩擦され、炭治郎の下半身で愉悦の核が弾け、思う存分射精絶頂を味わってしまった。これまで数多く淫鬼と交わってきたが、これほど深い快感は滅多にないほど強力だった。

「ふんどしひたひたになっちゃったね。脱がないと気持ち悪いね」

炭治郎の精液を含んだ下履きを引っ張って緩め、精液を吸って重くなった淫らな布が、電車の床に落下する。

その様子を絶頂で妄とした頭で見下ろしながら、炭治郎は屈辱も羞恥も感じる暇もなく、ただ激しく喘いで快感を収めようとした。

「可愛いね、イキ顔が凄く色っぽいよ。君みたいな子が男の娘をしてるなら、世の中の好き物は大歓迎だろぅね」

男たちの指が裸になった下半身に伸ばされる。スカートを大きく捲り上げられてウエストに突っ込まされ、下半身を裸にされた。

「じゃあ、次はここか？大丈夫だ、挿入したりしないから。そんなことしなくても、俺たちは十分な指テクを持つているからな」

ブルブルと快感に震えながら、炭治郎は秘孔に男の指が伸びてくるのを感じ、せり上がってくる淫熱に息を詰まらせた。

男の指が触れた瞬間、淫気が胎内に流れ込み、炭治郎は身体の内側から淫熱で煽られた。

「んっ・・・ぐっ・・・」

奥歯を噛んで必死に声を抑え、両足を踏ん張らせてなんとか立っている。

秘孔の表面を上下になぞられるたび、ゾクゾクとくすぐったい快感が押し寄せて炭治郎はそれに耐え、必死に声を殺す。本当は男たちの喜ぶ反応をしてもっとつけあがらせた方が淫鬼も呼びやすいのだろうが、卑劣漢相手にこれ以上媚びたくない。触るならいくらでも勝手に触ればいい、自分は石になったつもりで最悪の時間をやり過ごそうと炭治郎は思い込んで堪えた。

「あれ？なんだかこ濡れてるな・・・」

爪の生え際程度に指を侵入され、炭治郎は小さく身体を縦に跳ねあがらせるが、さらに男の指は増えた。

「ケツが濡れるなんて聞いたことねえな。あれ、本当に濡れてら・・・」

おもしろがって男たちが、代わる代わる秘孔を弄り倒してくる。深い指の挿入こそまだされていないが、淫鬼の淫気を含んだ指で触れられると、痠熱が胎にたまって炭治郎を苛み、感じさせてくる。

「んんっ……くっ……！」

欲情を感じると濡れる巫子の身体からは、すでに太腿を伝うほど淫蜜が零れ出している。

「うあっ！ちよっ……んん……っ」

煙草臭い男がさらけ出された炭治郎の下半身を眺め、その反応している雛先を鑑賞しながら、ゆっくりと撫で回す。

（感じる快樂が強い……さっき出したばかりなのに、また疼いてくる……！）

歯を食いしばっていないければ情けない声が出てしまうほどの快感に、炭治郎は戸惑いながらも耐える。

※中略※

そこまで言って、炭治郎は黙った。「無惨を倒せない」と言う言葉を飲み込んで、義勇から視線を逸らせて俯く。

「自分の技量がわからないヤツは死ぬ。それを推し量れないお前は、やはりまだまだ甘い……」（またそれ言うんだ）

義勇は炭治郎の淫鬼討伐の話を聞きたびに、そう言っ炭治郎を諫める。炭治郎もいい加減に聞き慣れたが、いつまでたっても認めてくれない態度に少し拗ねた気分になる。

そして、機嫌を損ねた風な炭治郎を見て、決まって義勇は言う。

「お前はよくやっている。もっと自分の身体を大事にしろ。俺たちとは調伏の仕方が違うんだから」  
そう言っ炭治郎を抱き寄せ、濡れた頭を撫でるのだ。

(ずるいなあ)

大人の簡単なあしらい方で、炭治郎の機嫌はすぐ直ってしまう。

身体のがりがひび割れている、と言われた通り、今日は義勇から流れてくる妖気が一層身体に沁み込んで入ってくる。

炭治郎の変化に気づいたのか、義勇はもう一方の手も使って、炭治郎の頭を抱き込み、上から唇を重ねてきた。

「ん・・・」

優しいキスに炭治郎の喉から鼻にかかった甘い声が零れる。

痴漢どもに何度も奪われた唇だが、今のキスとは比較にならないほど気持ちがいい。

義勇の身体から妖気が流れてくる。水中での靈気の受け渡しはため息が出るほど気持ちが良い。

話を聞くと、義勇の教義は狐に縁のある神様で、さらに義勇は水寄り。つまり、水狐ということになるらしい。

同棲生活を始めてから風呂場でセックスをしたがる義勇を、最初は勝手に「そういう趣味なのだ」と炭治郎は失礼ながら思っていたが、自分の妖力が有利に働く水場で、炭治郎をいつも労わってくれているのだ。

(優しい人だな・・・)

唇が離れると、また頬ずりをしてくる。なんだか勘違いしてしまいそうな甘い仕草に、炭治郎の心がどんどん柔らかくなってゆく。



「義勇さん・・・」

その黒髪に両腕を回し、今度は炭治郎の方から口づける。義勇はいつの間にか風呂の縁から両腕を離し、炭治郎の身体に掌を這わせて、ゆっくり自分の胡坐をかいた足の上に向かい合わせて炭治郎を座らせる。義勇の渾身はすでに猛り、その硬さと熱さが炭治郎の臀部に当たった。

炭治郎はすでに妖気に惑わされて発情状態になり、身体中のヒビに義勇の妖気が染み渡り、癒されてゆく愉悅に熱い吐息をつき始めている。

義勇の長い指が一本、いきなり奥まで秘孔に挿入され、炭治郎が綺麗なカーブを描いて背中を反らせた。

「あぁっ・・・！」

指からも流れ込む妖気が、男どもに散々穢された胎内に入り込み、凌辱の傷を癒してゆく。

「ふぁ、はぁ、はぁ、あぁ・・・っ」

気持ち良さに炭治郎が義勇の肩口に顔を埋め、その広い背中に両手を回して強く引き寄せる。義勇はそんな炭治郎の顔を舐め額の痣にも舌を這わせる。ぎざぎざの突端を持った痣は、徐々に丸みを帯びてゆく。炭治郎の髪が赤を増してゆく。

「んっ・・・ぁ、あぁ・・・っ」

身体に染み渡る妖気が気持ち良くて、炭治郎は快楽に蕩けた声を上げて義勇に縋る。そのまま耳も舐められて、背筋のゾクゾクが止まらない。

「・・・今日は感じやすいな」

ボソリと義勇が呟いたので、炭治郎は愉悅に流されていた自分を鑑みて、急に顔を朱くさせた。

「す、すみません、気持ちよくて・・・」

正直に炭治郎が恥ずかしそうに言うと、義勇はさらに指を奥深くへ突き挿れた。

「あああつ・・・！」

炭治郎の声が艶を帯びていて、聞いていると堪らない。

（煉獄もこれを・・・）

聞いたのだろうか、と思うと、義勇はすこぶる面白くなかった。さらに指を奥に挿れて、性感帯の部分に到達させ、指先を曲げて軽く引っ掛けて妖気を流し込んでやると、炭治郎は目を見開いて身体を縦にビクビクと痙攣させた。

「あつ・・・ああ、あああつ！」

ここもかなり荒らされた跡が残っている。ヒノカミの巫子の調伏方法は知っているが、ここまで身を挺してまでも遂行しなければならぬかと思うと、残酷な気分になる。

炭治郎はまだ15歳だ。田舎で純粹培養されたような純朴な少年が、性知識だけは人以上に持っているというのは、実に倒錯的だ。

日頃は零れ落ちそうに大きな赫い目をクリクリと動かし、快活に笑って陽だまりのような雰囲気を発する純粋な少年が、閨事になると男を誘う淫夫になるとは。

愉悦に感じる姿は、昼間の炭治郎からは想像もつかない変わりようで、義勇は何故か誰にも見せたくない、と独占欲が湧いてくる。

何を言うか、炭治郎は淫に乱れてこそその巫子だ。

艶姿の安売りは感心しないが、これが炭治郎に運命づけられた業なのだ。

しかし、目の前で快楽に乱れる表情を見ると、義勇の獣欲を煽って止まず、頭から喰らいついて、腹に入れて閉じ込めたくなくてくる。

(馬鹿な)

自分の妄想を鼻で笑い、義勇は何度も炭治郎の胎を指先で刺激した。

「んっ！ああああっ！ああっ！」

指を咥える胎が締まり、達悦の兆候を見せる。炭治郎も目をつむり、快楽を純粹に受け止めているようだ。義勇はそんな炭治郎の表情に見惚れながら、指の動きを激しくして、意地悪をせず素直に果てさせた。

「あああつ・・・！！」

炭治郎の健康的な肌から珠の汗が浮かび、赤毛をぬって額からも汗が零れ落ちる。絶頂した瞬間の炭治郎の表情は本当に美しい。昼間の日輪のような底なしの明るさを放っている少年と、同一人物とは思えないほど艶っぽい。

胎で絶頂を迎えて義勇の妖気を取り込み、二重の愉悦を受けて炭治郎がこちらにしな垂れかかってくる。

(可愛いな・・・)

その頭を優しく撫でてやりながら、義勇は指を引き抜くと、炭治郎の身体を浮かせて秘孔に自らの渾身が当たるように動かせる。

「んんっ、あ、はあ、も、もうですか・・・？」

普段の義勇なら、炭治郎の身体をゆるゆると弄んで、炭治郎の身体が最高潮に欲情したところで抱きにかかってくる。

まだ炭治郎に正常な理性が残っている状態での交わりは、珍しかった。

「中が想像以上に荒らされてるからな。これをやった方が、手っ取り早く身体を回復できるだろう」  
義勇は無表情な声でそう言うが、自分で嘘だ・・・と自覚していた。

今日の調伏や煉獄に抱かれたこの身体を、早く自分のものに戻したいという執着が湧き上がり、義勇は早く自分の身体で炭治郎を乱したかった。

「んんっ、はい、お願いします・・・」

向かい合わせになって互いの両腕を相手の背中に絡め、義勇は炭治郎の唇に軽く触れて、その身体を下方へ落とすべく、腰に手を回して力を入れた。

「炭治郎、そのまま腰を落とせ」

「はあ、はい・・・」

まだ挿入されていないのに熱に浮かされたような炭治郎の曖昧な返事に、ゾクゾクと劣情を感じながら義勇は自分も腰を突き上げて炭治郎の胎に侵入した。

「ああっ・・・！」

炭治郎の身体が震え、さらに強い力で義勇の肩に縋る。

相変わらず中は熱く、男に最上の快楽を与えてくる胎だ。強烈に締め付けてくるが、中が淫蜜で濡れて挿入をスムーズにさせる。

風呂場で湯に浸りながらの目合いということで、義勇の妖力が水に行き渡って炭治郎の快樂を手伝って、挿入と同時に侵入した湯で軽く悪戯をしてやる。

「んんっ！お腹の、なか・・・！」

はあはあと喘ぐ炭治郎が、顔を紅潮させながら義勇を見つめてくる。胎内に入った湯で内壁を少し刺激してやり、炭治郎の胎の中でちゃぷちゃぷと音がする。

「それ、止めてください・・・」

「妖気を流しているだけだ。かなり荒らされてるな。今日も自分を囿に使うって調伏したのか？女装までして」

それを聞いて炭治郎は一瞬動きを止めた。

「な、なんで知って・・・！」

顔をますます紅潮させて、炭治郎は義勇から目を逸らせた。ここで白をきれば逃れられるものを、炭治郎は正直すぎる性格なのですぐに認めてしまう。まあ、否定したとしても、是と言うまで問い詰めるつもりではあるが。

「俺は「柱」だぞ。それを知るぐらいのネットワークは持っている。電車の痴漢騒ぎも把握していたが、もう少し機を見て調伏するつもりだった。まさか、お前が女装してまで囿になって挑むとは思わなかつ・・・」

そこまで言って、炭治郎に口を塞がれた。顔は俯き、耳まで真っ赤になっている。

「も・・・もう言わないでください・・・」

女装したことがそんなに恥ずかしかったのか、炭治郎は義勇と目を合わせず俯いて落ち着かないことこの上ない様子だ。

さらに「似合ってたぞ」、などと言おうものなら、終いに怒って風呂から出ていたかもしれない。

義勇は腰を突き上げ、炭治郎の胎の性感帯を突いた。すると、真っ赤にさせた顔を反らせて、炭治郎が快楽の声を上げる。

「あっ、ああ！」

「全て忘れる。気持ちよくしてやるから、背中に手を回せ」

「んん、はい・・・」

（別に気持ちよくなりたいから手を回すわけじゃないけれど）

自分の性欲を認めたくない炭治郎は、そう思いながら素直に義勇の広い背中へ両腕をぎこちなく回した。義勇が腰を突き上げると、水中の浮遊感が伴って簡単に炭治郎の身体は跳ねてしまう。

「んんっ！あ、ああ・・・っ！」

二人の動きで水面がちやぶちやぶと音を立て始め、二人の情欲は興に乗り始めた。

そして炭治郎の背中には、誰かに触れられているような感覚が感じられる。背中だけではなく、水没している皮膚の全てに、柔らかく撫でるような感覚が生じていて、炭治郎はその心地よさにため息を漏らす。間違いなく義勇が仕掛けて炭治郎を水で愛撫しているのだろうが、炭治郎にはこの感触に覚えがあった。

いっどこで、などと詳細は覚えていないが、水に激しく身体を乱された記憶が蘇り、その凄まじかった快感に、身体が勝手に熱を上げてしまう。

(だからあんまりお風呂でしたくないのに・・・)

全てを思い出してしまったら取り返しがつかないような怖さを感じながらも、炭治郎は義勇の水と腰の技巧に溺れる。

散々男たちに荒らされた胎内に、慣れた妖気が染み渡る愉悦は息も詰まってしまふほど気持ちがいい。炭治郎の赫い瞳からあまりの好さに涙が零れ、義勇がその涙を吸い、また頬ずりをする。

(気持ちいい・・・)

男同士でこんなに身体をくっつけて、べたべたするなど世間では嘔飯ものなのだろうが、性的な概念の境界が薄い炭治郎は、自分を気持ちよくしている義勇に感謝すら感じる。

自分を抱くときに伝わってくる義勇の底なしの優しさを感じられて胸が熱くなり、なんだか切なくなっ  
て涙が自然と零れ、炭治郎はより義勇の背中に縋って甘い声を上げ続けた。

「ふあ、あ、妖気、沁みる・・・堪えられない・・・！」

炭治郎の身体が激しく痙攣し、義勇の背中に爪を立ててしまう。それを痛いと言って諫めることもせず、義勇は炭治郎の訴えを考慮して、腰の動きを緩やかにした。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

丁度よい具合の愉悦に降りてきたらしく、炭治郎が万感のため息を吐く。

(妖艶だ、可愛らしい)

自分の腕の中で震える、極上の手触りを持った炭治郎の肌を全身で堪能しながら、義勇の気持ちは充足に満ちていた。

※中略※

舌で舐め上げて炭治郎を快感で震わせながら、煉獄が聞いてくる。

(そ、そうだけど、言うの恥ずかしい……)

急激に羞恥心が湧いてきて、炭治郎は荒い息を吐いて、返事を誤魔化した。すると返事をせがむように、硬くなった桜色を唇で強く食まれる。

「あっ！そ、そこっ……ほんとにつ……！」

熱い唇の上下で挟まれ、さらに抜くように左右に動かされて、炭治郎の身体は無意識に仰け反った。

片方の胸だけでも十分感じていると言うのに、もう一方は指で弄ばれている。しかも、ヒリ付きそうなほどの熱が伴って、炭治郎の性感がどんどん高まって、堪らなくなってくる。

「うあっ！はああ、や、やめ、ああああっ……！あ、あああつ！ん、ぐっ、はあああ……！」

喉から湧き出てくる生唾を必死に飲み込みながら、炭治郎は艶声を上げて身悶え続ける。

片手で簡単に炭治郎の身体を押さえつけて、煉獄は胸への愛撫を続ける。

「あああつ……！ほ、本当にだめですっ！感じすぎて、も、もう、んんんっ……！」

灼熱の快楽が胸の性感帯を激しく愛撫し、低温の炎で炙られているかのような感覚に、炭治郎は喘ぎを止められない。



刺激し続けられる胸の快楽に身体を振らせながら、炭治郎は涙を一粒、二粒、と零して悦に耐える。義勇の錬気とは全く異なる感覚と快楽に戸惑いながら、身体は完全に欲情し、炭治郎の官能は触れられていない下半身に激しい疼きを感じさせた。

「うあああつ！あつ！つ………っ！」

指先で桜色を捏ね回され、舌先で上下に激しく弾かれ、炭治郎は一気に胸絶頂へと到達していた。体中にぞくぞくとした快感が走るが、全身の血管が茹ったように熱く、その熱さも相まって身体がさらに快楽で痺れてしまう。

「んああつ！はあ、はあ、あつ！も、イッた……もう、止め……！」

しかし煉獄は炭治郎の訴えを無視して愛撫を続けている。

指で弄んでいた一方へ口を、口で弄んでいた一方は指へと入れ替え、それぞれ異なる快楽刺激に、炭治郎は絶頂直後の性感帯を甘く激しく愛撫される。

「きよ……じゅ……ろ……さん、また、いくっ……！」

電流を浴びているかのように炭治郎の身体が激しく波打ち、炭治郎は両方の胸で簡単に絶頂を迎えてしまう。しかし、その愉悦は最初の絶頂を上回る強さだった。

「あつ！あつ！あああつ！ああああ———！」

官能の炎に炙られ、炭治郎の身体が乱舞し、華奢な身体を振じって強烈すぎる快楽から逃れようとするが、煉獄の腕が完全に逃げることを許さない。

口と指で愛撫を続けられ、炭治郎は絶頂から降りることができない。しかも煉獄から与えられる快感は通常の刺激と違って強烈で、意識が飛びそうになるのを辛うじて堪えているのだ。

胸の愛撫だけでここまで感じてしまうのなら、本格的に抱かれてしまったらどうなってしまうのだろう。胸の快感を受け入れるだけで精いっぱい今の炭治郎には、この先の愛撫など考えも及ばないが、口と胸を責められただけで、もう体中からは汗が流れ、炭治郎の意識は妄と霞み、身体がもっと愉悦が欲しいと叫びを上げる。

少し大人しくなった炭治郎を見て、煉獄は口を離し、両指で桜色を巧みに操りながら、炭治郎の艶姿を鑑賞する。

煉獄の指の動きに合わせて、炭治郎が首を仰げ反らせたり、鎖骨に顎を埋めたり、その表情も快楽に溺れたかと思うと、爪で刺激されて強刺激に目を見開き、大きな赫い目から涙を零す。

「ううっ、ああ、はあ！ああっ！あ、あああああ……っ！」

善がる炭治郎の声も甘く、聞く者の性欲を増長させる。煉獄は再び炭治郎の唇を奪い、舌を挿し入れて口内を荒し回った。

「んぐぐっ！んんっ、んっ！んん——！！」

口から新しい錬気が注ぎ込まれて欲情が上がり、煮上がった身体をさらに錬気を纏った煉獄の指で胸の桜色を好いように弄ばれる。

炭治郎の身体が何度もビクビクと跳ね上がり、その身体で感じる快楽の凄さを体現する。

ゆるゆると桜色を指先で優しく愛撫を続け、軽い絶頂を長時間持続させられるのは、低温の炎で炙られ続けるような刺激だが、低温よろしく温度が低くともその中身はすでにポロポロになっている。

「んっ、んんんっ！」

急に煉獄に唇を強く吸引され、後頭部にゾクゾクと快楽が走った瞬間、胸の突起を指先でギューと抓まれ、低温の炎が高温に変わり、突然の刺激で炭治郎はすぐに更に高い絶頂を迎えてしまった。

「んんんん——！！」

腰と頭だけで身体を支えるほどに背中を弓なりに反らし、炭治郎が激しく達悦する。

「ふあ、はあ、はあ、はあ……」

胸で強く絶頂してしまったが、煉獄は余韻を楽しめるように未だにゆるゆると桜色を弄んでいる。

（んん、気持ちいい……）

絶頂から完全に降りるにはなだらかなカーブを描いて降りる胸の絶頂だが、それに合わせて優しく刺激されると、そのまま気を失いそうなほど気持ちが良い。

「身体は大丈夫か？ 練気は辛くないか？」

煉獄に問いかけられ、炭治郎は半分霞んだ頭で言葉を返す。

「う……はい……とても熱いですけれど……大丈夫です……」

「そうか、熱いか」

嬉しそうに煉獄は言い、また炭治郎に口づけをする。炭治郎の身体を煉獄の大きく熱い掌が這い回り、胸や脇腹、腹筋を撫で回してくる。

「炭治郎、好ければ好いと言ってくれると嬉しいんだが」

「は、はい・・・」

そう言ったものの、煉獄の前で快楽を訴えるのは気恥ずかしく、返事は小さくなってしまふ。

（んん、熱い、熱さが肌に浸透してくるみたいだ・・・）

煉獄に愛撫される度に欲情がどんどん上がり、炭治郎の身体は雄を迎合するように変化する。

肌の手触りは極上に、身体から放たれる香りは催淫を含み、上がる声は鈴のように可愛らしくて甘い。

胸の絶頂だけで何度か吐精してしまった雛先が、強く反応して淫液を零して下腹を濡らし、秘孔からは、

胎の奥が疼いて淫蜜が滴って大布団に染みを作る。

身体中を撫で回されながら、さらに熱い唇で胸や腹筋、脇腹に吸い付かれ、官能の炎がどんどん激しく

なつてゆく。

「んっ、あ、はあ、ああ、ああ・・・っ」

炭治郎の身体は煉獄の丁寧な愛撫で芯まで灼かれ、すでに指で触れられるだけで、唇を当てられるだけ

で快楽が迸り、快楽に浮かされて表情を蕩かせていた。

「君の肌は・・・凄いな。こんな触り心地は初めてだ。好すぎるぞ、炭治郎」

いつも言葉を口にするときは声を張る煉獄が、静かな声で言った。しかしその響きには必死に耐えてい

る熱い響きが垣間見え、煉獄もまた欲情しているのだと分かる。しかし、身体中の愛撫を受け止めるの

に必死な炭治郎にはわからない。

煉獄の愛撫は丁寧で、溶岩のように熱い錬気を炭治郎の肌へ少しづつ浸透させてゆく。その大きく熱い手の感触は心地よく、炭治郎は愉悅のため息を吐きながら、煉獄の手の動きに合わせて身体を妖艶にぐねらせる。触れれば想像以上の反応を返す身体を愛でるのは、これ以上ないほどに楽しく嬉しい。煉獄は炭治郎の体中に唇を落とし、その痕跡を無数に残して愛撫を続ける。

しかし、煉獄の錬気で煮え上がった炭治郎の身体は、浅ましくもさらに強烈な快感を無意識に求め始めていた。

触れられず何度か達悦した雛先が切なくて、胎の中がじくじくと疼く。淫蜜がどんどん溢れ、炭治郎は両足をもぞつかせて足の爪で布団の上を引っ掻く。

「んううっ、あ、ああ、あああっ……！」

腰が勝手にヒクついて刺激を求め、涙目で乱れる様は息を呑むほどに淫靡だ。

「錬気には、慣れたか？」

煉獄に耳元で囁かれ、炭治郎は熱に浮かされた頭で必死に思考を巡らせる。

「あ……はい、たぶん……あの、煉獄さん……」

炭治郎は炎のような熱い息を吐きながら、目をつぶって恥じ入るような小さな声で言葉を口にした。

「も、もう、身体、熱いです……抱いて……ください……」

消え入りそうな声で炭治郎が言い終わると、煉獄は突然炭治郎の耳朶に激しく噛み付き、痛みを感じるほどそれは強かった。

「いっ痛っ……」

しかしすぐにその部分を舐めなおされ、熱い官能の刺激へと変わってゆく。

「君は、あまり相手を煽らない方がいい。正直、俺も限界なんだ。君の身体……いただいてもいいかな？」

震え気味で嬉しそうに言う煉獄の声を聞いて、炭治郎は素直に「はい」とだけ答える。

煉獄は炭治郎に頬ずりをし、その唇に口づける。

放した時に「愛い……」と呟き、炭治郎の顔を見つめたまま、そそり勃っていた雛先を手で握り込んだ。

「あああああつ！」

予想以上の熱さに、触れられているところばかりか、身体全体の肌が震え、染み入る熱が強烈な愉悅に成り代わる。

「大丈夫か？」

「んっ、んんっ、だいじょ……ぶ……です、熱い……杏寿郎さん……！」

握られているだけで達悦しそうなほどの刺激だと言うのに、そのまま上下にゆっくりと動かされて、熱の移動に意識が全て持っていかれて快樂しか残らない。

「ああつ！あつ！あああああつ！」

炭治郎の腰がぐいと仰け反ると、雛先から白液が吐き出された。

まだ愛撫が始まって三十秒と経っていないと言うのに、この絶頂は早すぎるが、欲情の炎で煮え上がった炭治郎の身体では持ち堪えることなど無理だった。

これまで上半身だけで絶頂させられ、快楽が伝播して触れられず何度も吐精していたが、ようやく望む刺激を与えられて歓喜に打ち震えたが、その快楽が構えていた以上に強烈で、炭治郎は気を失いそうなほどの快楽を感じた。

「ふああっ・・・気持ち・・・い・・・です・・・」

射精しても腰をヒクヒクと痙攣させ、はあはあと荒い息を吐いて涙を零す炭治郎の艶顔を見ながら煉獄はさらに雛先を握り込んで上下に擦る。

「うあっ・・・！い、今イッたばかりで・・・っ！感じ、すぎてっ・・・！はあっあ、熱い、熱いっ・・・！」  
吐精の余韻が終わらないうちにまた愛撫を再開され、炭治郎は絶頂の糸を掴んでしまう。

雛先から淫液を零し、少しでも摩擦されるとすぐに射精絶頂してしまい、煉獄が余計な技巧を凝らさずとも炭治郎は簡単に絶頂する。

まるで快楽が詰まった器のように、炭治郎は立て続けに絶頂を極めた。

「はあ、はあ、はあ、も・・・痺れて・・・腰が・・・熱い・・・」

連続絶頂で蕩けた炭治郎の表情をずっと見続けていた煉獄だったが、自分の身体も限界だということには気づいている。しかし、炭治郎の絶頂の瞬間の表情が愛らしくて美しく、妖艶で何度も見ていたい思っていた。

それでも自分の役割は炭治郎の身体に練気を注ぎ込んで身体を正すことだ。それに、炭治郎を感じさせる手筈はこれからなのだ。

「指を挿れるぞ。大丈夫か？」

炭治郎の精液に濡れた指を下におろし、双丘の間へと忍び込んでゆく。

煉獄の指の熱さに炭治郎の身体が一瞬ヒクついたが、連続絶頂の余韻が冷めやらない様子ながら、炭治郎は艶にまみれた声で返事をする。

「んんっ・・・大丈夫です・・・はあ、そこ、熱い・・・」

炭治郎の身体を抱いたことがあるとはいえ、今は身体が一回り小さくなっている。以前のように抱いて大丈夫だろうか、と煉獄は逡巡するが、下半身に滾っている陽物の滾りが抑えられなくなってきている。

煉獄も早く炭治郎を抱きたい。この極上の身体を組み敷いて、今まで感じたことが無いほどの快楽を与えてくる胎に挿入して、思う存分貪りたい。

しかし、そこで自分の獣欲に負ける煉獄ではない。今は錬気も伴っているのだ。無茶をさせれば、炭治郎の身体に障る。

煉獄の逞しい指が秘孔に一本埋め込まれ、走る灼熱に炭治郎が背中を仰け反らせる。

「あああああっ・・・！」

指がたった一本挿入されただけなのに、胎の奥が一気に発情して中の性感帯が急激な疼熱に包まれる。指先から炎の錬気が伝わってきて、追い打ちをかけるように、炭治郎の官能をこれでもかと刺激してくるのだ。

「うっ・・・あ、ああ、熱いです・・・身体が、とても・・・あっ・・・もっど・・・」

弱い声で快楽を求めるが、炭治郎の身体に変化が訪れた。



炭治郎の赫い瞳が宝石のように煌めき、髪も赤みを強く帯びてくる。額の痣は尖った先端が丸くなり、明らかに炭治郎の身体に異変が起きている。

驚いた煉獄は指をゆっくり引き抜こうとしたが、洞内が生き物のようにキュウと締まり、煉獄の指を胎内に留める。

「っ・・・炭治郎・・・」

「そのまま続ける。炭治郎は大丈夫だ」

焦って状態を確かめようとする煉獄に、冷めた義勇の声が飛ぶ。

「本気で欲情すると、痣の形が変わる。お前は合格らしい。とっとと抱いてやれ」

錬気を練っているときは、雑念が入らないように義勇と炭治郎の睦合いを碌に見てもいなかったのも、炭治郎の変容に気づかなかった。いや、これまで抱いていて自分が気づいていなかっただけなのかもしれない。

正直炭治郎の身体は好すぎて、煉獄は虜になってしまっていた。自戒をいつも念頭に置いているというのに、炭治郎を抱いて初めて己の欲に流されてしまった。

この身体は本当に男の本能を刺激する魔性を持っている。甘く見て抱いた自分が今となっては不甲斐ないが、思いのまま相手を抱くのも悪くない気分だった。

煉獄は蕩けた炭治郎の表情を見ながら、指をもう一本増やしてやる。

「あああつ・・・！」

鼻にかかった甘い声が細い喉から飛び出し、身体を刺激でヒクヒクと痙攣させている。

しかし炭治郎のその表情は、喜んで笑っているかのように見えた。

(なんと妖艶な、これは)

煉獄は炭治郎に艶姿を見せつけられ、音が出そうなほどの生唾を飲み込んだ。

胎内に挿入した指で内壁を探り、襷を擦ると淫蜜が溢れ、指の動きが潤滑になる。指先をくの字に曲げて、出し挿れをすると炭治郎の身体が激しく仰け反り、甘い吐息を上げる。

「ああつ・・・！あつ、んっ・・・あんまり激しくは・・・」

しかしそう言う声の響きには快楽を愉しむ悦びが見え隠れしていて、その表情と相まって、今の炭治郎は妖艶の一言に尽きる。

煉獄はとりあえず、錬気を纏った指を挿入しても、炭治郎の身体に悪い影響が出ないことに安堵した。指をさらに一本増やしてゆっくりと抽挿してやると、奥から大量の淫蜜が溢れてくる。

「あああああつ！熱いです！あああつ！杏じゅ・・・ろ・・・さんっ・・・」

炭治郎の目端から涙が零れるが、はあはあと紡ぎ出される吐息は相変わらず甘い響きを持っていて、煉獄の克己心をどこまでも試してくる。

炭治郎の胎内が煉獄の指を挟んで、中で熱くうねっている。ここに魔羅を挿入すれば、どれだけの快楽を得られるだろうか。それを考えると、までもや生唾がせり上がって来てしまう。

煉獄は頭に血管を浮き上がらせながら耐え、あくまで指での愛撫を疎かにしない。

指が三本に増え、炭治郎が受ける錬気も増量し、目の前の華奢な身体が快楽と熱に何度も跳ね上がる。

「ああつ・・・あつ・・・ああ・・・っ！」

「炭治郎、もう少し、耐えてくれ」

煉獄はそう言つて炭治郎に口づけを施し、口からも錬気を押し流す。上下両方からの注ぎに炭治郎の身体の中で精気がかち合い、胎内で熱く灼ける。

「んんんっ！んんんっ！んんんん——！！」

※中略※

気が付くと、炭治郎は神装姿で異形と戦い続けていた。表面はぬるぬるとして、まさに軟体。鋭い刃を突き立てるのに骨が折れる。

手にした日輪刀は異形を斬りすぎて脂が付着し、切れ味が落ちている。炭治郎の呼吸も荒く、肩で激しく息をしている。

こめかみがドクドク響いて、心臓は破裂しそうだ。身体の動悸は激しいのに、手足が酷使しすぎて震え、立っているのもやっとな状態で、刀を握る両手も下がり気味だった。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

一体いつから戦っているのだろう。記憶がない。しかし、目の前に丸太のような触手が繰り出され、炭治郎はそれを避けて切断し、不浄な液体を浴びる。そうかと思えば、足元に恐ろしく長い四本の手が迫り、掴んでくる手を炭治郎は跳躍して躲す。

しかし、飛んだところで真上から平べったい物体に身体を強かに打たれ、炭治郎は衝撃で一瞬意識を消失し、気が付いた時には地面に叩きつけられていた。

内臓全体を揺さぶられた叩きつけの振動が大ダメージだった。地面に這いつくばって悶え苦しみ、炭治郎は体勢を立て直せない。

「うっ……げほっ……かは……あっ！」

当然異形たちは動きの止まった炭治郎を逃すはずがなく、日輪刀を握った右手を、空いた左手に触手を絡みつかせ、骨がきしむほど強く締め付けた。

「うあああっ！」

特に日輪刀を握った右腕を強く締め付けられている。だんだん右手の感覚がなくなり、ガシャン、と炭治郎の唯一の武器が地面に落下する音を聞いた。

(しまった、日輪刀が……！)

両手は強固に拘束され、とても拾える状況ではない。拘束された今の炭治郎は圧倒的に不利だったが、まだ炭治郎には巫子特有の「言霊」の祝詞が残っている。坊主のお経よろしく、霊力のある祝詞を口上し、周囲の異質を払うのだ。

しかし、炭治郎が口を開いた瞬間、猿轡のように触手が口に巻き付き、動きを止められてしまう。

「んぐっ……！」

噛み切つてやろうにも、それができないほど口を大きく開かされて息苦しいほどだ。

抵抗の術を全て封じられ、炭治郎は焦る。しかし、両足はまだ拘束されていない。両手も祝詞もだめなら足がある。そう考えていた炭治郎だったが、せつかく炭治郎を拘束したと言うのに、異形たちは近寄ってこない。それどころか動きを止め、何かを待っている様子だった。

「久しぶりだな、炭治郎」

その声を聞いて、炭治郎は身体中が総毛立つ感覚と、顔から血の気が引く感触を覚えた。口の猿轡が外れ、炭治郎は怒りを込めてその名を呼ぶ。

「無惨・・・！」

それでもなんとか声を絞り出せたのは胆力が据わっている証拠だ。しかし目の前に現れた紳士は、そんな炭治郎の強い心を鑑みることなどなく、悠々とした足取りで近づいてくる。

「それでは、今日も余興を愉しもうか。またお前の体力が尽きるまで精々愉しませてもらう」  
そう言うと、目の前に突然一人用のソファが現れ、無惨はそれに腰掛けた。

（一体何をやる気だ！）

すまし顔の無惨の顔が憎らしく、炭治郎は足元の泥を蹴って無惨に届かせようとするが、両足も膝下から軟体の異形生物に拘束されてしまった。

そして鉤爪を持った触手が何本も炭治郎の周囲を囲み、衣服に引っ掛けて紙のように引き裂いてゆく。

「うあっ！やめろ！何をやるんだ！」

炭治郎の上半身の服を引き裂き、下半身も膝から上を全て引き裂いてしまう。腰に残ったベルトと着せられたままの市松文様の羽織が、逆に煽情的な姿だ。

今度は表面に粒をびっしりと備えた触手が視界を覆うほど迫り、地面に滴るほどの怪しげな粘液を垂らしている。

「いっ・・・！」

一本がぬるりと炭治郎の裸の胸に先端を擦りつけ、そのぬるつく感触に怖気と、ある感覚が昇ってくる。それを皮切りに様々な形をした触手が炭治郎の身体に襲い掛かり、若々しい肌の上を滑ってゆく。

(こ、こんな一斉に責められたら、防ぎようがない……！)

粘液まみれの触手の表皮が炭治郎の敏感な部分をくすぐるように擦れ、往復する。炭治郎の肌に甘い粘液が塗られたら、その部分が何故かジンジンと疼いてくる。

「うっ……うう、はあ、はあ……んぐっ……うう……っ」

粘質な触手に体中を撫で回されて、気持ち悪さと同時にくすぐったいだけでは括り切れない感覚もせり上がってくる。

敏感な首元へ、ブラシに粘液を含んだ触手が何度も上下に撫で上げ、炭治郎は必死に首をひねって逃れようとするが、拘束された身体では逃れようもない。結局いいように首元や鎖骨周り、果ては唇まで擦り回され、後頭部にゾクゾクと妖しい感覚が走ってくる。

左右に広げられた両足の間に、粒をびっしりと揃えた成人の腕ほどの太い触手が迫り、両足の間を前後にゆっくり擦り上げてくる。

「んんっ……！ぐっ……うああ、やめろっ！くそ、ううっ……！」

身体中に塗られた粘液の成分のせいか、いつの間にか身体が発情し、炭治郎は堪え難い官能に打ち震え始める。そこへ性感帯への直接の刺激は脳が痺れるほど心地よかった。

ぬるぬると両足の間を何度も通過し、秘孔、会陰、雛先全てをなぞってどんどん炭治郎を感じさせてゆく。秘孔からはすでに淫蜜が零れ、反応した雛先からは先走りの淫液が垂れている。それらを掬うように触手は撫で上げ、その刺激的な粒の連なりでできた身体で炭治郎を高めてゆく。

「うあつ！あつ！ううっ……！このっ……！ああっ……！」

拘束された両足をできる限り暴れさせて、触手の責めから逃れようとしている最中に、今度は縦へ上下に割れた触手が迫り、上半身の両方の桜色を包んで吸い上げてくる。

「くあつ……！そこ、やめっ……！」

炭治郎の身体が激しく仰け反り、あまりの快感に手の指先にまで甘い痺れが走破する。

先日の義勇と煉獄との儀式で、一時的に胸から乳が出る妖術を掛けられてから、炭治郎のそこは一際立つて感じる部分になってしまっていた。

そこを性的に昂った身体へ吸い付かれ、何も考えられない愉悦が走る。

「んぐっ、ふあ、くっ……！や、やめろ！ああつ、あつ……んんんっ……！」

両足の間を擦る触手の動きが速くなり、摩擦される性感帯の快感が一気に上昇する。下半身で生じた熱は全身に伝わり、上半身に至っては、責められ続けている桜色にまで快感が響いてくる。

「あああつ！あつ！あつ！あつ！」

雛先を粒触手がグリグリと押し付け、そのまま強く摩擦されると快楽しか感じられず、炭治郎から甘い声上がる。

（うあ、果てる、このままだと、い、いやだ……！）

炭治郎が齒を食い縛って快楽に耐えていると、目の前で座っている無惨が一言口にした。

「炭治郎、快楽を感じるのは悪いことじゃない。むしろ良いことなんだ」

その台詞を言われた瞬間、炭治郎の中の薄氷が突然ひび割れた。

過去にその言葉を聞き、炭治郎の心に深く沁み込んだ覚えが蘇ってくる。

（気持ちいいのは、良いこと・・・）

それを心の中で反芻してしまうと、快楽に対する反抗心が一気に縮小し、炭治郎は我慢を忘れて快感を受け入れてしまった。

「んんっ・・・！あ、ああああっ！あっ！はあああ・・・っ！」

残像が生じるほど素早い調子で摩擦してくる両足の触手が、さらに食い込みを強くした瞬間、炭治郎は雛先から白液を勢いよく噴き出し、絶頂と言う敗北を喫してしまった。

「はあ、はあ、はあ、はあ・・・」

吐精の息が治まらないうちにも触手は勝手に動き、そのまま両足の間を跨いで淫蜜を垂らす秘孔へと、のた打ちながら押し広げ、胎内に侵入してきた。

（気持ちいい、触手が、身体の中に、挿ってくる・・・！）

すでに反抗する気が萎え、炭治郎は素直に身体で感じる感覚を「気持ちいい」と思ってしまうようになっていた。



淫らな音を立てる粘液を分泌しながら、触手が挿入されてゆく。炭治郎の体中を撫で擦っていた触手たちも力加減がわかってきたらしく、丁度よい具合に愛撫を続ける。粘液を纏った様々な形状の触手が無数に伸び、炭治郎の身体に絡み、巻き付き、炭治郎の身体を感じさせようと優しく摩擦してくる。

「ふあ、ああ、あああつ・・・！」

炭治郎の背中が弓なりに反り返るが、羽織の隙間を通って触手が忍び込み、その背中も無数の触手が撫で上げた。身体が快楽を迎合し始めると、乱れるのは早い。盛大に善がり声を上げて、炭治郎は顎を仰げ反らせた。

「んぐっ、痛っ・・・！はああ、あつ！」

炭治郎の秘孔に侵入しようとする粒触手は身が太く、簡単には侵入を許さない。しかし炭治郎が悲鳴を上げると、秘孔から零れる淫蜜を使って秘孔に擦り付けてさらに滑りを良くし、自らも粘液を多量に分泌して臀部を濡れ濡れにすると、今度はゆっくりと挿入を仕掛けてくる。

「んんっ・・・あ、ああ、うあつ！そこは、だめ、あつあああつ！はああ・・・っ！」

炭治郎の様子を見ながら挿入を果たした触手は、そのまま胎内を進み、腹の性感帯にまで到達する。善がり声を上げた部位を目敏く感知し、触手は執拗にその場所への刺激を続けた。

（そ、そこは辛い、感じてしまう、ああ、こんな、どうしてこんなに気持ちいいんだ・・・！）

粘膜と胎肉の擦れる水音が響き、再び反応している雛先を細かい粒を揃えた触手が粘液に濡れながら擦りつけ、甘く刺激してくる。

「はあ、はあ、んあああつ！あつ、あつ、ふああ、あつ、はあ、はあ、はあ・・・！」

細かい粒の一つ一つが感じられるほど敏感になってしまっている雛先を、炭治郎が最も良い反応を返した瞬間を見逃さず、その時の強さで延々と摩擦し続ける。

(こ、こいつら、学習能力があるのか？ どんどん俺の身体を・・・！)

雛先と胸の桜色、胎内を責められながら、炭治郎は次第に理性を蕩かしかけていた。挿入されたときに若干ヒリついた痛みがあった触手も、急速に具合がよくなって炭治郎の胎内の好い部分を的確に愛撫し、その粒を揃えた表面で摩擦される度に快感がどんどん上昇して行ってしまう。

(か、身体が熱い・・・興奮が止まらない、ああ、気持ちいい、気持ちいい・・・！) 心が快楽を迎合してしまうと、身体が墮ちるのは早かった。全身で感じる愛撫が急激に愛しくなり、暴れだしたくなるほどの快感が炭治郎を包み込み、頭も心も蕩けそうだ。

「はあ、うああ、あつ、あつ、だ、だめ、感じたらいけない、気持ちよくなったらダメだっ・・・！」 炭治郎の最後の理性が中身の言葉を叫ぶが、目の前で見ている無惨が再び言う。

「何故ダメなんだ？ 炭治郎。気持ちいいのは良いことだぞ？ 教えただろう？」

(教え・・・られた・・・)

炭治郎の中でドクン、と心が脈打ち、根底にある淫らな性が表面に顔を出し始める。

「うっ・・・うう、うああっ・・・！」

舌の形状をした触手が炭治郎の雛先を舐め回し、射精の快感で一瞬何も考えられなくなる。同時に胎内の触手も強く締め付けてしまい、身体で感じる悦が急激に上昇する。

炭治郎の反応に気をよくしたのか、胎内の触手が一気に最奥まで侵入し、胎を押し上げられる苦しさや意識が飛ぶ激感が炭治郎の身体を走る。

「あああああああつ！」

たったそれだけで達悦してしまい、炭治郎は身体を小刻みに震わせて屈辱の絶頂を噛み締めていた。しかも、無惨の目の前で。

(こんなヤツの前で、恥を晒すなんて……！でも……)

悔しがる炭治郎だが、言葉が浮かぶほど屈辱は感じていない。むしろ慣れたこの感覚が異常に不思議で、妙な既視感が先程からずっと続いている。

粘液を纏った触手が破れた服の合わせ目から侵入し、肌をひたひたに濡らしながら丁度良い強さで愛撫を施してくる。

感じたくないのに身体は勝手に反応して、肌は素直に反応を返した。

「あつ……ああ……ふああつ……！あぐ、ああ……つ」

炭治郎の喉からも抵抗の言葉ではなく、甘い善がり声上がるようになってきた。様々な形状の触手に体中を撫で回され、染み込まされる快楽に抗うことができない。

胎内に挿入された粒触手はすっかり身体に馴染み、炭治郎に耐えず涙が出そうなほどの快感を打ち込み続けている。

あ、あ、と喘ぐ炭治郎の両足の間にブラシ状態の野太い触手が食い込み、長い身体を使って端から端まで動く距離を、時間を掛けてズルズルと擦り、炭治郎の性感を高めてゆく。

「あ、あ、ああ、いや、やめろ、あああつ・・・！」

前から後ろに擦られると雛先の鈴口と会陰が刺激され、それが長く続いて終わったかと思うと、今度は後ろから前に摩擦し続けられ、会陰と雛先の裏筋を延々と擦られ、これが一番悦が強い。

（ああ、イク、また出る、気持ちいい、我慢できない、ああ、ああああ・・・！）

炭治郎の身体が痙攣し、雛先からふんだんに白液が吐き出される。

「んうううっ・・・っ！」

意識が白むほどの射精感に痺れながら炭治郎は身を固くさせ、すぐに弛緩させたが、触手の動きは止まらない。

「ま、待って、もういった・・・！」

しかし触手にとってはいつでもよいことなのだろう。粘液を含んだブラシ触手が執拗に両足の間を擦りぬき、炭治郎は何度も絶頂してしまう。

（こ、こんなおかしい、どうして何度も射精が・・・！）

しかし炭治郎は吐精の快感だけに構っていられない。胎内に侵入した粒触手が本格的に動き始め、炭治郎の身体が壊れそうになるほどに激しい挿挿を繰り返した。

「あつあつ！ああつ！うああつ！あつ！だ、ダメ、そこはだめ、ああああつ！イク、いつ・・・！あああああつ！」

稲妻のような絶頂感が体中を包み込み、この一回だけで炭治郎の身体は脱力してしまう。

しかし、触手の責めは容赦がない。絶頂した直後でも構わず激しい抽挿を繰り返し、炭治郎を決して休ませない。

「ああっああああっ！あぐっ！はああ、ああ、ああっあああ——！！」

三分と間を置かず再び昇りつめさせられ、炭治郎は身体を仰け反らせて達悦を叫んだ。

「いいぞ炭治郎。その無様な姿を、ずっと私の前に見せつけるんだ」

「うう・・・」

無惨が傲岸に言い放ち、炭治郎は屈辱で歯を食い縛る。しかしその意気も、身体中に絡む触手ですぐに快楽で流されてしまう。

「ああああっ！あっ！ああっ——！！」

また新たな絶頂が炭治郎を襲う。抗うことも我慢することもできず、炭治郎は触手たちにいいように乱され、その身体を激悦で震えさせた。

「はあ、はあ、はあ、は・・・」

一体何時間触手に犯され続けただろう。炭治郎に時間の経過はわからないが、間断なく快楽を与えられて意識は愉悦の沼に浸らされている。

着衣の切れ端を身体に纏いながら、肌の上を様々な形状の触手が舐め回し、その度に触れられた箇所が蕩けそうになる。

「んんっ・・・！あ、ああああ・・・っ！」

もう百度は絶頂したかもしれない。再び秘孔を抉る、柔らかいブラシが密集した触手が、淫液と淫蜜を撒き散らしながら高速で胎を穿っている。

(降りられない、降りられない、ずっとイッてる、なにも考えられない・・・)

快楽で虫の息になった炭治郎の四肢に触手が絡み、ずっと椅子に腰掛けて眺めていた無惨の前に近づけられる。

「まったく、こんなおぞましい触手に犯されて快楽を感じるなど、とんだ淫乱だな、炭治郎。そうだ、お前は淫乱なんだ。だから感じるまま喘げ。叫べ」

(お、俺は淫乱・・・じゃ・・・)

そのまま両足を左右に開かれ、恥ずべき部分を全て晒され、乱れた秘孔から粘液が滴っている様は、淫靡以外の何物でもなかった。

「もっと好くしてやろう、炭治郎。もう何も考えられないほどにな・・・」

憎い相手に犯されると言うのに、炭治郎の身体は快楽を与えられ過ぎた疲労で動かせず、手指をヒクヒクと痙攣させて首を左右に振って抵抗の意思を示すことだけしかできない。

「嫌だ・・・やめてくれ・・・!」

しかし無惨は炭治郎の太腿を掴むと、激しく抱え込んでそのまま剛直を炭治郎の胎に挿入した。

「あああつ・・・!」

髪の中から足の指まで痺れるほどの快感が駆け巡り、これまで触手で絶頂させられた快感が小さな火花に感じるほど、無惨の身体は燃え上がるように熱かった。

(き、気持ちいい・・・ああ、そんなこと考えたら・・・)

しかし炭治郎の葛藤も知らず、無惨は口元に笑みを浮かべてそのまま腰を動かした。

「あつ！あつ！あつ！あつ！」

炭治郎の喉から甘く蕩けた声が零れ、触手に拘束された四肢が痙攣する。

挿入されてから常に達悦に等しい快感が続き、炭治郎は意識もそぞろになって一方的に与えられる快楽を享受するしかない。

(終わらない、終わらない・・・！このままだとずっと犯されたままになる・・・！)

無惨に後頭部を掴まれ無理矢理口づけをされるが、もう炭治郎に抵抗する力は残っていない。無惨特有の何枚にも感じる舌が炭治郎の頭を霞ませ、快楽の泥濘に漬けられそうになる。

しかしその直後、口腔を愛撫している舌の感覚が変わった。

口を離され相手を見ると、いつの間にか煉獄が炭治郎を抱えていた。

「しっかりしろ！攻撃されている！意識を強く持つんだ！夢から覚めろ！」

力強い煉獄の鬼気迫る言葉に、炭治郎の中の欲情が一気に吹き飛んだ。

身体に巻き付いていた触手が一瞬にして消え去り、炭治郎の右手に日輪刀が戻る。目の前の無惨と成り代わった煉獄の姿もスツと消える。

「はあ、はあ、はあつ！」

ようやく達悦の連続から解放された炭治郎だが、これが夢の仕業だとしたら、なんと生々しい夢だろうか。しかし、現実ではありえない出来事をいくつか経験し、半信半疑ながら、炭治郎はこれは夢なんだ、と自分に言い聞かせた。

危機に陥っている自分を、煉獄が助けてくれたのだろう。それならば、自分も早々に目覚めなければならぬ。



続きは製品版でお楽しみください。